

## 公衆衛生活動報告

# 新宿区保健センターでの発達障害に関連する 「ちょっと気になる」についての保護者向けパンフレットの有効性の評価

サトウ タイチ コヤナギ ジュン クラタ ジュンコ ナンジョウ カオリ  
佐藤 太一\* 小柳 淳<sup>2\*</sup> 藏田 純子<sup>3\*</sup> 楠城 香織<sup>4\*</sup>  
サクラモト マキコ<sup>3\*</sup> ヤマダ マリ<sup>4\*</sup> フジマキカスミ<sup>5\*</sup> タカハン イクミ<sup>6\*</sup>  
櫻本万紀子<sup>3\*</sup> 山田 万里<sup>4\*</sup> 藤巻嘉須美<sup>5\*</sup> 高橋 郁美<sup>6\*</sup>

**目的** 育児の中で発達障害に関して子どもに感じる気になることや育てにくさ（以下、「ちょっと気になる」）を抱える保護者が、相談先を知り、相談できるようになることは、保護者の育てにくさの解消や子どもの理解にとって重要である。新宿区では、「ちょっと気になる」について保護者向けパンフレットを作成し、その有効性を、保護者への質問紙に基づき評価したため報告する。

**方法** 2016年4月～6月の1歳6か月児、3歳児健診の対象者の保護者1,164人に、健診案内送付時にパンフレットと無記名自記式質問紙を同封し、健診当日に回収した。質問項目は、KAPモデルを参考に、保健所・保健センター職員により構成する作業部会で検討した。保健センターが「ちょっと気になる」の相談先であることへの理解状況は属性により分析し、「ちょっと気になる」への態度については、パンフレットを読む前後の変化があるか分析した。また、周囲に「ちょっと気になる」について困っている保護者がいた場合の態度についても集計した。自由記載の回答は内容に基づき分類した。

**活動結果** 1歳6か月児、3歳児健診対象者の保護者、各269人（43.5%）、358人（65.7%）の回答を得た。保健センターが「ちょっと気になる」の相談先であることを「パンフレットを読んだわかった」が398人（67.5%）であった。出生順位や健診区分による有意差は認められなかった。パンフレットを読む前では子どもの「ちょっと気になる」について、「保健センターに相談」が14人（6.8%）だったが、パンフレットを読んだ後は61人（29.5%）となり、有意に増加していた。現時点で「ちょっと気になる」がない保護者の、周囲に「ちょっと気になる」について困っている保護者がいた場合の態度は、「気持ちを理解したい」243人（62.6%）と回答したものが多かった。自由記載では、今後の周知活動への要望や、パンフレットの効果に関する記述が見られた。

**結論** パンフレットは、保護者がわが子に「ちょっと気になる」がある場合、相談先を理解してもらい、相談することを前向きに捉えてもらうために有効ではないかと考えられる。また、周囲の保護者にとっても「ちょっと気になる」子とその保護者への関心を高めた可能性がある。パンフレットをすべての保護者に配布することは、地域で子育てをしていく際の安心感を与えるものであることが示唆された。

**Key words** : 発達障害, パンフレット, 普及啓発, 質問紙調査, 保健センター

日本公衆衛生雑誌 2019; 66(12): 737-745. doi:10.11236/jph.66.12\_737

\* 元新宿区東新宿保健センター

2\* 新宿区高齢者支援課

3\* 新宿区牛込保健センター

4\* 新宿区四谷保健センター

5\* 新宿区東新宿保健センター

6\* 新宿区健康部

責任著者連絡先：〒260-8672 千葉市中央区亥鼻 1-8-1 千葉大学大学院看護学専攻科博士前期課程 佐藤太一

## I はじめに

健やか親子21（第2次）の重点課題①は「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」であり、その指標の1つである「発達障害をはじめとする育てにくさを感じる親への早期支援体制がある市区町村の割合」の最終目標は100%である<sup>1)</sup>。よって、市区町

村において育てにくさを感じる親への支援体制構築は必須であると言える。

発達障害児の母親は、子どもが診断を受ける前に、子どもへの対応方法がわからず育児に辛さを感じていたり、子育てについて期待する情報と支援が十分得にくいなどの困難を抱えていたりすると言われている<sup>2)</sup>。そのため、早期支援体制が整うことで、それら保護者側の困難が軽減されると考えられる。また、保護者の感じる育てにくさの内容を、子どもの発達上の課題の兆候という視点から吟味することが発達障害の早期発見・早期支援につながると言われている<sup>3)</sup>。したがって、保護者が日々感じている育てにくさに着目することは親子双方への支援のきっかけとしても重要であると言える。

以上のように、子育て支援を行う上で育てにくさに着目することは、親子双方にとって重要であることは明らかであるが、そのためには保護者が育てにくさを支援者に対して相談することが必要となる。しかしながら、保護者は、子どもに対して何らかの「気づき」を持っていたとしても、それをどのように解決すればよいのか、そもそも解決しなければならぬものなのかどうかという認識をもちにくいと言われている<sup>4)</sup>。そのため、育てにくさが支援者に対して相談されるとは限らず、「気づき」や育てにくさを相談することを促す支援が必要であると言える。

そこで、新宿区では、保護者が、育てにくさを相談できる場所として保健センターを認識し、具体的にどのようなことが保健センターでは相談できるのかを知ってもらう必要があると考えた。また、保護者が子どもの特性を理解するに至るまでの間には、子どもの障害の可能性の否認などの心理的過程を経るため<sup>5~7)</sup>、健診の場では、子どもの遅れを指摘されないように振舞う可能性もある<sup>8)</sup>とも言われている。そのような可能性を踏まえると、知識があることに加えて、保護者が相談することを前向きに捉えられるような態度を形成できるよう支援することが必要であると考えた。さらに、発達障害児をもつ保護者は、周囲の理解ない言動によって傷ついた経験をもつことがあるため<sup>5,6)</sup>、すべての保護者が発達障害児の行動の特性を理解し、見守る姿勢をもってもらう必要もあると考えた。

そのため、新宿区では2015年度、以下の3点を目的に、健診時に配布する全保護者向けパンフレットを作成し、2016年度から配布した。目的は、①発達障害に関連する育てにくさを保健センターに相談できることを保護者が知る、②保護者が発達障害に関連する育てにくさについて相談することを前向きに

捉える態度を形成する、③現時点で育てにくさを感じていない保護者も、周囲に発達障害に関連する育てにくさを感じるような児とその保護者がいた場合には、その親子を見守ることができるようになる、の3点である。今回は、この保護者向けパンフレットの有効性を、保護者への質問紙に基づき評価したので報告する。なお、今回作成したパンフレットでは「育児の中で発達障害に関して子どもに感じる気になることや育てにくさ」を「ちょっと気になる」と表現したため、本報告においても、これ以降はその用語を用いることとする。

これまで発達障害児をはじめとする育てにくさを感じる親への支援体制の整備について報告がある中で<sup>9,10)</sup>、本報告は、保護者が「ちょっと気になる」について相談先を知り、相談しようと思えるために必要な活動とその評価に関する報告である。つまり、これは、市区町村が整備する支援体制を、保護者が活用しやすくしていくための支援とその評価の報告であると言える。よって、本活動を報告することにより、支援体制整備と並行して、それを保護者が活用できるようにするための支援を検討する機会を各市区町村に提供できると考える。そして、それを検討する際に参考となる具体的な支援方法の1つとして、保護者向けパンフレットの有効性を示すことで、活動の手段を検討する際の資料を提供できると考えた。

## II 方 法

### 1. 新宿区保健センターにおける主な乳幼児支援の体制

まず、本報告に関連する新宿区の保健センターにおける乳幼児支援の体制の概要を示す。区内には、1保健所4保健センターが設置されている。3,4か月児健診を各保健センターにおける集団健診、6~7か月児健診と9~10か月児健診を委託医療機関における個別健診として実施している。また、1歳6か月児健診は内科健診と歯科検診にわけて行い、内科健診を委託医療機関における個別健診、歯科健診を各保健センターにおける集団健診として実施し、3歳児健診は各保健センターにおける集団健診として実施している。また、1歳6か月児歯科健診と3歳児健診において、非常勤心理士による心理相談を実施している。そのほか、健診日とは別に非常勤心理士による相談を月に2~3回程度各保健センターで開催し、医師による発達相談をある1つの保健センターで隔月開催している。なお、すべての時期において地区担当保健師が重層的に支援する体制をとっている。

## 2. 保護者向けパンフレットの作成

新宿区では2014年度に「発達に課題がある児」(1歳6か月児健診, 3歳児健診などで医師や心理士から発達について何らかの指摘を受けた児, 発達についての相談歴がある児, 親から育てにくさに関する相談を受けた児)に関する分析を行った。分析は, 2012年4月から9月に新宿区の保健センターで実施された3歳児健診対象児(2009年3月から8月生まれ)1,074人の母子管理カードの記録を対象に行い, その結果1,074人中237人(22.1%)を「発達に課題がある児」として把握し, その内32人(3.0%)が発達障害(傾向含む)と判断されていた。なお, 237人の把握経路は, 1歳6か月児歯科健診108人(45.6%), 3歳児健診107人(45.1%), 保健師の相談12人(5.1%), その他の機関からの紹介5人(2.1%), 医療機関からの紹介4人(1.7%)であった。また, 237人のうち, 199人(84.0%)が保健センターでの心理相談(健診当日および別日に開催)を利用し, 心理相談の最終結果は, 一時指導のみ113人(56.8%), 相談を継続利用し好転終了48人(24.1%), 療育機関紹介20人(10.1%), 転居終了9人(4.5%), 保護者が継続相談の必要性を感じず利用中断6人(3.0%), 相談継続・医療機関紹介・その他機関紹介が各1人(0.5%)であった。以上のことから, 発達に課題がある児の早期把握と支援には, 健診と心理相談が重要であることを確認した。その結果をもとに, 2015年度には保健所および保健センター職員で構成する「発達に課題がある児」の支援の充実についての作業部会で検討を行い, 新宿区の発達障害児の親の会(以下, 親の会)のメンバーにも検討への協力を依頼した。その中で, 健診や心理相談などの機会は重要だが, そもそも育児の中で子どもに感じる気になることや育てにくさは相談してもよい(または相談したほうがよい)という考えに至らないことや, 保健センターがそういった内容に関する相談先であることがわからない人もいる, ということが親の会のメンバーの発言から明らかとなった。そこで, 作業部会では健診(1歳6か月児健診, 3歳児健診)時に配布する保護者向けパンフレットを作成した。なお, 心理相談の開催回数増加の検討や, 健診従事者を対象とした研修会企画および手引きの作成も並行して行った。

パンフレットは, 育児の中で発達障害に関して子どもに感じる気になることや育てにくさを「ちょっと気になる」と表現し, 題名を「「ちょっと気になる」は子どもを理解するチャンス」にすることで, 相談することを気軽に前向きに捉えてもらえるよう配慮した。パンフレットの目的は, ①保健センター

が「ちょっと気になる」の相談先であることを保護者が知る, ②子育ての中で「ちょっと気になる」を感じている保護者が, 子どもに関して気になることや育てにくさに気づき相談しようと思う, ③周囲の保護者が「ちょっと気になる」児やその保護者に対し, 暖かく見守る気持ちになる, とした。パンフレットの内容は①「ちょっと気になる」の例示, ②「ちょっと気になる」ことを相談することは, 子どもの「その子らしさ」などを発見・理解できるチャンスになることの説明, ③「ちょっと気になる」に対する医師のコメント, ④「ちょっと気になる」の相談先の提示, ⑤「ちょっと気になる」児が遊び場などでトラブルを起こすこともあり, その際にはその子なりの理由があることの説明と, その親子が地域で孤立しないようにするためには周囲の理解が必要なことの説明, とした。「ちょっと気になる」の例示については, まず親の会の代表に, わが子が1歳6か月や3歳の時に感じていた「ちょっと気になる」を親の会のメンバーから集めてもらい, 作業部会に提示してもらった。それをもとに, 作業部会で, 2014年度に分析した健診時の保護者の主訴の実態や, 日本語版 M-CHAT<sup>11)</sup>の項目, 発達障害の関連書籍<sup>12,13)</sup>を参考にしながら例示の内容を検討した。「ちょっと気になる」の内容は, 1歳6か月児向けは「ことばがゆっくり」「まだ歩かない」等, 8項目であり, 3歳児向けは「上手に歩いたり走ったりできない」「こだわりが強い」等, 10項目である(表1)。配布対象は, パンフレットの目的を達成するため, 全保護者とした。

表1 「ちょっと気になる」の内容

1歳6か月児	3歳児
<ul style="list-style-type: none"> <li>ことばがゆっくり</li> <li>まだ歩かない</li> <li>視線が合わない</li> <li>慣れない場所で親がいなくても平気</li> <li>指さしがない</li> <li>他の子どもに興味がない</li> <li>すぐどこかに行ってしまう</li> <li>寝つきが悪い/敏感ですぐ目が覚める</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ことばがゆっくり/会話にならない</li> <li>上手に歩いたり走ったりできない</li> <li>こだわりが強い</li> <li>慣れない場所でも親がいなくても平気</li> <li>視線が合わない</li> <li>何回言っても言うことを聞かない</li> <li>スプーン/フォークで食べられない</li> <li>乱暴で他のお母さんたちに謝ってばかり</li> <li>他の子どもと一緒に遊べない</li> <li>片時も目が離せない</li> </ul>

### 3. 対象者

新宿区の2016年4月～6月の1歳6か月児健診、3歳児健診の対象者の保護者1,164人（それぞれ619人、545人）を対象とした。

### 4. 調査方法

2016年4月～6月の健診対象者への案内送付時に保護者向けパンフレットと無記名自記式質問紙（以下、質問紙）を同封し、健診当日、会場に設置した回収箱で、回収した。

### 5. 調査項目

#### 1) 調査項目の検討過程

調査項目について、著者が参加した母子保健事業の評価に関する研修講師（大学教員）に、研修終了後に本件に関する助言を依頼した。著者が研修講師により、面接、メール等で助言を受け、それに基づき調査項目を作成し、作業部会のメンバーの検討を経て、調査項目を決定した。なお、調査項目の作成にあたっては、KAPモデル<sup>14)</sup>を参考にした。

#### 2) 調査項目の内容

基本属性については、今回の健診対象児の出生順位、健診対象児について「ちょっと気になる」にあてはまる特性の有無とその内容を訪ねた。「ちょっと気になる」については、パンフレットで例示したものと同様のものを項目として示し、有の場合にはその内容を複数回答で選択するよう求めた。

KAPモデルを参考に作成した質問項目は、「ちょっと気になる」について保健センターが相談

先であることの理解状況（KAPモデルのKnowledge）、わが子の「ちょっと気になる」についての態度（KAPモデルのAttitude）、周囲の「ちょっと気になる」子とその保護者への態度（KAPモデルのAttitude）、の3項目である（表2）。わが子の「ちょっと気になる」についての態度に関する項目は、基本属性において「ちょっと気になる」が「ある」と回答した保護者にのみ回答を求めた。「ちょっと気になる」について保健センターが相談先であることの理解状況は、「パンフレットを読む前から知っていた」、「パンフレットを読んでわかった」、「よくわからなかった」の3選択肢から1つの回答を求めた。わが子の「ちょっと気になる」についての態度は、「どうしたらよいかわからない」、「気にしないようにする」等、7選択肢からあてはまるものすべての回答を求めた。なお、この項目については、パンフレット前後の状況を比較するため、パンフレットを読む前を振り返ってもらい、同様の質問への回答を求めた。周囲の「ちょっと気になる」子とその保護者への態度は、「どうしたらよいかわからない」、「あまり関心がない」等、5選択肢からあてはまるものすべての回答を求めた。

また、その他、意見や感想を求める自由記載そのままを設け、今後のパンフレット内容の見直し等のための情報が得られるようにした。

### 6. 分析方法

質問項目のデータは、単純集計し、実数と比率を

表2 KAPモデルを参考にした質問項目の内容

	対 象	質 問 項 目	回答の選択肢
Knowledge (知識)	全保護者	<ul style="list-style-type: none"> <li>「ちょっと気になる」について保健センターが相談をお受けしていることがわかりましたか？</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>パンフレットを読む前から知っていた</li> <li>パンフレットを読んでわかった</li> <li>よくわからなかった</li> </ul>
	「ちょっと気になる」が「ある」の保護者	<ul style="list-style-type: none"> <li>パンフレットを読んで「ちょっと気になる」についてどうしようと思いましたか？(複数回答)</li> <li>※パンフレットを読む前の状況と比較するため「パンフレットを読む前、「ちょっと気になる」についてどうしていましたか？(複数回答)」にも同時に回答を求めた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>どうしたらよいかわからない</li> <li>気にしないようにする</li> <li>家族に相談</li> <li>友人に相談</li> <li>保健センターに相談</li> <li>その他機関に相談</li> <li>その他</li> </ul>
Attitude (態度)	全保護者	<ul style="list-style-type: none"> <li>パンフレットを読んで、今後周囲にお子さんの「ちょっと気になる」について困ったりしている保護者がいた場合、どのように思われますか？(複数回答)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>どうしたらよいかわからない</li> <li>あまり関心がない</li> <li>気持ちを理解したいと思う</li> <li>誰かに相談するようアドバイスする</li> <li>その他</li> </ul>
	Practice (実践)		該当項目なし

確認した。その後、保健センターが「ちょっと気になる」の相談先であることへの理解状況について、属性（出生順位別、健診区分別）による違いをカイ二乗検定にて分析した。また、パンフレットを読む前と読んだ後のわが子の「ちょっと気になる」についての態度については、McNemar 検定にて分析した。分析には IBM SPSS Statistics Ver25を使用し、統計上の有意水準は5%とした。また、自由記載の記述は、類似している内容を分類して集計した。

### 7. 倫理的配慮

質問紙の冒頭に調査の依頼と、調査者の個人が識別、特定できないよう処理する旨を記載し、調査の実施に対する理解と参加についての了承を求めた。質問紙は無記名とした。質問紙調査の項目の適切性については、所属内で検討し、所属長の了解を得た。質問紙は健診当日に所定の回収箱を設置し、回収することを明記し、質問紙の提出をもって同意の取得とした。

## Ⅲ. 活動結果

新宿区の2016年4月～6月の1歳6か月児健診、3歳児健診の対象者の保護者、それぞれ619人、545人へ質問紙を送付し、269人（43.5%）、358人

表3 回答者の属性

		1歳6か月児健診 (n=269)		3歳児健診 (n=358)	
		n	%	n	%
出生順位	第1子	173	67.3	216	63.3
	第2子以上	84	32.7	125	36.7
「ちょっと気になる」にあてはまるものがあるかないか	ある	76	29.3	131	39.0
	ない	183	70.7	205	61.0

無回答の者は除く

(65.7%) の回答を得た。

### 1. 回答者の属性 (表3)

出生順位は、1歳6か月児健診で第1子173人(67.3%)、第2子以上84人(32.7%)、3歳児健診で第1子216人(63.3%)、第2子以上125人(36.7%)であった。

「ちょっと気になる」にあてはまるものが「ある」と回答した者は、1歳6か月児健診で76人(29.3%)、3歳児健診で131人(39.0%)であった。

### 2. 保健センターが「ちょっと気になる」の相談先であることへの理解状況 (表4)

保健センターが相談先であることを「パンフレットを読む前から知っていた」が162人(27.5%)、「パンフレットを読んでわかった」が398人(67.5%)、「よくわからなかった」が30人(5.1%)であった。

出生順位別では、「パンフレットを読む前から知っていた」が、第1子103人(27.6%)、第2子以上54人(27.3%)、「パンフレットを読んでわかった」が、第1子250人(67.0%)、第2子以上134人(67.7%)、「よくわからなかった」が、第1子20人(5.4%)、第2子以上10人(5.1%)であった。出生順位別に理解状況について有意差は認められなかった。

健診区分別では、「パンフレットを読む前から知っていた」が、1歳6か月児健診74人(28.4%)、3歳児健診88人(26.7%)、「パンフレットを読んでわかった」が、1歳6か月児健診178人(68.2%)、3歳児健診220人(66.9%)、「よくわからなかった」が、1歳6か月児健診9人(3.4%)、3歳児健診21人(6.4%)であった。健診区分別にも理解状況について有意差は認められなかった。

### 3. わが子の「ちょっと気になる」についての態度 (表5)

質問紙で「ちょっと気になる」が「ある」と回答した者(1歳6か月児健診で76人、3歳児健診で131

表4 保健センターが「ちょっと気になる」の相談先であることへの理解状況

		パンフレットを読む前から知っていた		パンフレットを読んでわかった		よくわからなかった		検定結果
		n	%	n	%	n	%	
		162	27.5	398	67.5	30	5.1	
出生順位	第1子 (n=373)	103	27.6	250	67.0	20	5.4	n.s
	第2子以上 (n=198)	54	27.3	134	67.7	10	5.1	
健診区分	1歳6か月児健診 (n=261)	74	28.4	178	68.2	9	3.4	n.s
	3歳児健診 (n=329)	88	26.7	220	66.9	21	6.4	

無回答の者は除く。

$\chi^2$  検定 \*  $P < 0.05$ , \*\*  $P < 0.01$ , n.s: not significant

表5 わが子の「ちょっと気になる」についての態度の変化（複数回答）

	パンフレットを読む前 (n=192)		パンフレットを読んだ後 (n=192)		検定結果
	n	%	n	%	
どうしたらよいかわからない（かった）	17	8.9	17	8.9	n.s
気にしないようにする（していた）	59	30.2	37	19.3	**
家族に相談	93	45.3	72	35.4	**
友人に相談	65	31.3	47	22.4	**
保健センターに相談	14	5.7	61	31.8	**
その他機関に相談	22	11.5	24	12.5	n.s
相談しようと思ったができなかった	2	1.0	—	—	—
その他	38	17.7	33	16.1	n.s

無回答の者は除く。

McNemar 検定

\*  $P < 0.05$ , \*\*  $P < 0.01$ , n.s: not significant

人のうち有効回答数192人)の態度は、パンフレットを読む前では「家族に相談」93人(45.3%)、「友人に相談」65人(31.3%)、「気にしないようにしていた」59人(30.2%)、「その他」38人(17.7%)、「その他機関に相談」22人(11.5%)、「どうしたらよいかわからなかった」17人(8.9%)、「保健センターに相談」14人(5.7%)、「相談しようと思ったができなかった」2人(1.0%)であったが、パンフレットを読んだ後では「家族に相談」72人(35.4%)、「保健センターに相談」61人(31.8%)、「友人に相談」47人(22.4%)、「気にしないようにする」37人(19.3%)、「その他」33人(16.1%)、「その他機関に相談」24人(12.5%)、「どうしたらよいかわからない」17人(8.9%)であった。パンフレットを読む前と後で、態度についてみると、「保健センターに相談」が14人(5.7%)から61人(31.8%)に有意に増加し( $P < 0.01$ )、「気にしないようにする(していた)」が59人(30.2%)から37人(19.3%)、「家族に相談」が93人(45.3%)から72人(35.4%)、「友人に相談」が65人(31.3%)から47人(22.4%)にそれぞれ有意に減少していた( $P < 0.01$ )。

#### 4. 周囲の「ちょっと気になる」子とその保護者への態度(表6)

周囲に「ちょっと気になる」について困っている保護者がいた場合の態度について、質問紙で「ちょっと気になる」が「ない」と回答した者388人でみると、「気持ちを理解したいと思う」243人(62.6%)、「誰かに相談するようアドバイスする」

表6 周囲の「ちょっと気になる」子とその保護者への態度(n=388)

	n	%
気持ちを理解したいと思う	243	62.6
誰かに相談するようアドバイスする	209	53.9
どうしたらよいかわからない	22	5.7
あまり関心がない	6	1.5
その他	9	2.3

209人(53.9%)、「どうしたらよいか分からない」22人(5.7%)、「あまり関心がない」6人(1.5%)、「その他」9人(2.3%)であった。

#### 5. 自由記載の内容(表7)

自由記載は、54人から回答が得られた。

内容にもとづき整理したところ、【パンフレットやその他周知活動への保護者側からの意見・要望】、【パンフレットが保護者に与えた効果】、【その他】に大別された。それぞれの内訳をみると【パンフレットやその他周知活動への保護者側からの意見】は〈パンフレット内容への意見〉13件、〈更なる相談先等周知活動への要望〉7件であり、【パンフレットが保護者に与えた効果】は〈相談先の情報取得による不安軽減〉11件、〈「ちょっと気になる」子と保護者への関心の高まり〉4件、〈子どもの成長・発達を振り返るきっかけづくり〉3件であった。

また、さらにそれぞれの内容をみると〈パンフレット内容への意見〉は「パンフレットの改善案の提案」6件、「パンフレットの内容は不安をおおるものであると感じた」3件等の内容であり、〈更なる相談先周知活動への要望〉は「パンフレットによる情報提供は大切である」4件等の内容であった。また、〈相談先の情報取得による不安軽減〉は「相談先があるとわかり(相談してよいことがわかり)安心した」4件等の内容であり、〈「ちょっと気になる」子と保護者への関心の高まり〉は「「ちょっと気になる」子の保護者への共感」2件等の内容であり、〈子どもの成長・発達を振り返るきっかけづくり〉は「「ちょっと気になる」と感じていたが見過ごしていたことがはっきりした」1件等の内容であった。〈その他〉は「子育てをして日々感じていることや悩みの表出」19件等の内容であった。

#### 6. パンフレット内容への意見をもとにした2017年度用パンフレットの改善

質問紙の自由記載の内容のうち〈パンフレット内容への意見〉の記述例を表8に示す。そのうち、「パンフレット内容の改善案の提案」では具体的な

表7 自由記載の内容 (n=54)

		件数		件数
パンフレットや その他周知活動 への保護者側か らの意見・要望	パンフレット内容への意見	14	パンフレットの改善案の提案	6
			パンフレットの内容は不安をあおるものであると感じた	3
			素敵なパンフレットだと思った	3
			パンフレットの内容がわかりにくい	2
更なる相談先等周知活動へ の要望	7	パンフレットによる情報提供は大切である	4	
		様々な方法で相談先などの情報提供を行うことが必要である	3	
パンフレットが 保護者に与えた 効果	相談先の情報取得による不 安軽減	11	相談先があるとわかり(相談してよいことがわかり)安心した	4
			保健センターが相談先であることがわかった	2
			相談することを前向きに・気軽に感じられるようになった	2
			相談したいことがあった時には相談したい	2
			相談することで気持ちも落ち着く	1
	「ちょっと気になる」子と 保護者への関心の高まり	4	「ちょっと気になる」子の保護者への共感	2
	子どもの成長・発達を振り 返るきっかけづくり	3	困っている人がいたら保健センターへの相談をすすめたい	2
「ちょっと気になる」と感じていたが見過ごしていたことが はっきりした			1	
			子どもの様子を見ていくことは大切だと思った	1
			年代ごとの成長・発達の特徴がわかった	1
その他	その他	30	子育てをして日々感じていることや悩みの表出	19
			パンフレット以外の保健センター事業に関する意見・要望	8
			アンケートの設問に対する意見	3

表8 パンフレット内容への意見の内訳と記述例

	記述例
パンフレットの改善案の提案	・相談窓口で対応していただける時間・曜日の記載が電話番号の近くにあると、より親切だと思いました。
パンフレットの内容は不安をあおるものであると感じた	・心配をあおるようなパンフレットだと思います。深く考えればすべての子どもがどれかの項目に必ずひっかかりそう。
素敵なパンフレットだと思った	・とてもすてきなパンフレットだと思います!!
パンフレットの内容がわかりにくい	・パンフレットの目的がわからない。「ちょっと気になる」が気にしなくて良いことなのかどうなのかがいまいちわかりにくい。

相談時間や曜日を明記してほしいという意見があったため、それら必要事項を追加した。また、「パンフレットの内容がわかりにくい」では、「パンフレットの目的がわからない。「ちょっと気になる」が気にしなくて良いことなのかどうなのかがいまいちわかりにくい。」という意見があった。そのため、「ちょっと気になる」と感じた場合に、まずは、健診の機会等に保健センターに相談することを提案する部分を強調した。

#### Ⅳ 考 察

##### 1. パンフレットの目的に照らした評価

保健センターが「ちょっと気になる」の相談先で

あることを元々知っていた保護者は3割弱で、「パンフレットを読んでわかった」保護者は約7割であった。また、その割合は出生順位や健診区分によっても有意差は認められなかった。ここから、従来の健診体制では、保健センターでの健診を受けることや、その中での通知文などによる情報提供では不十分であったといえ、パンフレットの配布が有効であったと考える。自由記載の回答においても〈更なる相談先等周知活動への要望〉が7件みられていた。

また、パンフレットを読む前は「ちょっと気になる」についての態度が「家族に相談」、「友人に相談」が多く、「その他機関に相談」、「保健センターに相

談」が少なかったが、これは「育児に伴う不安感」を相談する相手が「夫」がもっとも多く、次いで「友人」であり、相談相手として「専門家、行政」が低かったという報告と同様である<sup>15)</sup>。しかし、パンフレットを読んだ後は「家族に相談」に次いで「保健センターに相談」が多くなり、それに伴って「気にしないようにする(していた)」と回答した割合が減少していた。これは、パンフレットの効果ではないかと考えられる。近年、育児に取り組む家庭の孤立化が指摘され、親が育児に不安や困難さを感じつつも、解消されないまま抱え込む危うさがある<sup>1)</sup>と言われている。今回のパンフレットを読むことにより、保健センターに相談しようと思う人が増えたことから、パンフレットは「ちょっと気になる」を相談しようとする態度を形成する支援として有効ではないかと考えられる。そのため、今後は保護者が相談できたかを検証する必要があるが、悩みを抱え込む危うさを軽減できる可能性が示唆された。

さらに、自分自身の子どもには「ちょっと気になる」が「ない」と回答した保護者の半数以上が「気持ち理解したいと思う」、「誰かに相談しようアドバイスする」と答えている。自由記載への回答内容においても〈「ちょっと気になる」子と保護者への関心の高まり〉が4件みられていた。母子保健活動ではどんな家族(親子)も排除されることのない地域づくりが必要である<sup>16)</sup>とされている。パンフレットを読む前と後での比較はできていないが、今回のように全保護者へパンフレットを配布することは周囲の肯定的な態度の形成にもつながるのではないかと考えられる。

## 2. 情報提供の手段がパンフレットであることのメリット・デメリット

今回、質問紙のパンフレットの自由記載欄への回答において「パンフレットの内容は不安をあおるものであると感じた」という意見が3件みられた。これは発達障害児をもつ保護者が子どもの特性を理解するまでには、様々な心理的過程を経る<sup>5~7)</sup>ことから予想されたものであった。このことから、こうしたパンフレットは単独で配布するのみでは、不安だけが残ってしまうと考えられるため、パンフレットを読んだ後に、実際の健診の場面でその不安が解消できるような支援があわせて行われることが配布の前提である。

以上の前提を踏まえた上で、今回のパンフレットによる情報提供のメリットを考えると、必要な情報を保護者が確実に受け取ることができること、保護者の否認を誘発せずに情報を提供できること、保護者が子どもの状態を振り返った上で健診にのぞめる

ことの3点があると考えられる。これまでの報告で、広汎性発達障害の保護者が保健師に期待する支援ニーズとしては「広汎性発達障害に関連した情報提供」と「社会資源に対する情報提供」があると報告されている<sup>17)</sup>。今回のパンフレットの内容では「ちょっと気になる」の例示、「ちょっと気になる」に対する医師のコメントが前者に対応し、「ちょっと気になる」の相談先の提示が後者に対応する。これらの内容は、健診時間での口頭による情報提供に加えて、パンフレットを活用した方が、確実に情報を提供することができ、保護者も後で見返すことができると考えられる。また、実際の健診場面で、保護者に対し「発達障害の可能性があること」を直接伝えた場合には、保護者の否認を誘発することも考えられるが、パンフレットは、読んでも読まないでもよいものであるため、そういった強制されない状況は母親に余裕を与え、その余裕が母親の能動性を生み出す<sup>7)</sup>といった報告もある。よって、パンフレットによる情報提供は否認を誘発することなく、相談意欲を高めるためにも有効ではないかと考えられる。さらに、今回のパンフレットは健診の案内送付時に同封するものであったが、自由記載の回答の中でも〈子どもの成長・発達を振り返るきっかけづくり〉になったという内容が3件みられていた。つまり、健診を受ける前に保護者が改めて子どもの状態を振り返り、相談した方がよいことはないか考えるきっかけを提供した可能性がある。

ただし、藤内が指摘する通り<sup>18)</sup>、行政からは様々なパンフレットが提供されるため、パンフレットに目を通してもらうためにも、必要な情報を必要ときにピンポイントで提供するための方法は検討していく必要がある。

## 3. ポピュレーションアプローチとしてのパンフレットの有効性

今回の質問紙調査の自由記載欄への回答を整理したところ、【パンフレットが保護者に与えた効果】として〈相談先の情報取得による不安軽減〉が11件みられた。母子保健のポピュレーションアプローチの方法として、健診の通知文書やホームページなどに、子育てを支援するという明確なメッセージを明記し、保護者に届けることが重要である。そして、こうしたメッセージが伝わることでサービスを利用しなくても、たとえば、子育てにおける安心感をもってもらうなどの一部を達成することができるのではないかと藤内は述べている<sup>19)</sup>。つまり、今回のように全保護者へパンフレットを配布することで、現在には育てにくさなどを感じていない保護者に対しても、地域で子育てをしていく際の安心感を提供し

てくことができる可能性もあると考えられる。

#### 4. 本活動を実施することができた要因

最後に、本活動を実施することができた要因について考察を述べる。本活動は、2014年度に実施された「発達に課題がある児」の分析の結果、地域の課題が存在することが明らかとなり、それを解決するための組織として設置した作業部会が基盤となったものであった。そして、その作業部会において保健センター職員と当事者である発達障害児の保護者により検討を行いパンフレットを作成した。その作成の過程の中で「せっかくパンフレットを作ったのだから、その効果も確認したい」という思いがメンバー間で共有され、時期よく著者が事業評価の研修に参加できたことから評価計画の立案を進めることができた。ただし、評価計画の立案は、研修講師である大学教員の度重なるサポートにより実現した。また、その講師による紹介により、著者の自己学習として健康教育に関する講座に参加し、その内容を作業部会で共有しながら評価を実施していくことができた。

以上のことから、本活動は地域診断（2014年度の「発達に課題がある児」の分析）から始まるPDCAによる地区活動<sup>20)</sup>といえ、それを推進した要因として①活動の基盤となる作業部会を設置したこと、②当事者も交えた検討により作成したパンフレットに対する作業部会メンバーの思いが「評価をしたい」という意識に繋がったこと、③研修への参加や大学教員のサポートを得ることで評価を立案・実施する知識を適時得ることができたことの3つがあると考えられた。

本報告にあたり、ご協力いただきました関係者の皆様に心より感謝申し上げます。とくに、評価計画を立案するにあたり多大なるご助言をいただきました東京女子医科大学大学院看護学研究科 清水洋子先生に心より感謝申し上げます。

なお、本研究は第75回日本公衆衛生学会総会で発表したものであり、開示すべきCOI状態はありません。

(受付 2018.11. 7)  
(採用 2019. 9. 4)

#### 文 献

- 1) 厚生労働省. 健やか親子21 (第2次). 2015. [http://sukoyaka21.jp/expert/targetvalue/importantissue\\_1](http://sukoyaka21.jp/expert/targetvalue/importantissue_1) (2018年4月6日アクセス可能).
- 2) 今井しのぶ, 古田加代子, 佐久間清美. 子どもの障害に気づき広汎性発達障害と診断を受けるまでの母親の生活上の困難. 日本公衆衛生看護学会誌 2018; 7: 3-12.
- 3) 小淵隆司. 広汎性発達障害幼児の早期予兆と支援:

乳幼児健康相談・健診における親からの訴え(心配事)の分析. 障害者問題研究 2007; 34: 298-307.

- 4) 林 隆. 軽度発達障害児への気づきと対応システム ちょっと気になる子たちの幸せを願って 軽度発達障害児への「気づき」と対応システムについての現状の課題. 小児保健研究 2007; 66: 195-197.
- 5) 吉野妙子. 発達障害児をもつ母親の育児の体験: 受診までの時期. 日本看護学会論文集小児看護 2014; 44: 78-81.
- 6) 土路生明美. 発達に遅れがある子どもの母親の子育て: 障害児デイサービス利用後の変化と支援に焦点をあてて. 人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌 2008; 8: 157-166.
- 7) 山崎せつ子, 鎌倉矩子. 自閉症児Aの母親が障害児の母親であることに肯定的な意味を見出すまでの心の軌跡. 作業療法 2000; 19: 434-444.
- 8) 中川信子. 健診とことばの相談. 東京: ぶどう社. 2002; 11-16.
- 9) 額由由美子. 【発達障害児支援の「みる」「つなぐ」「動かす」】子ども未来センターと連携した発達支援相談の取り組み 犬山市における支援事業. 保健師ジャーナル 2013; 69: 985-990.
- 10) 宮本佳代子. 【発達障害児支援の「みる」「つなぐ」「動かす」】山梨市における「2歳児健診」の取り組み 育児支援の枠組みで行う発達障害の早期把握・早期支援. 保健師ジャーナル 2013; 69: 991-997.
- 11) 国立精神・神経医療研究センター. 日本語版 M-CHAT. <https://www.ncnp.go.jp/nimh/jidou/aboutus/mchat-j.pdf> (2019年2月14日アクセス可能).
- 12) 田中康雄, 監. イラスト図解 発達障害の子どもの心と行動がわかる本. 東京: 西東社. 2014; 30-65.
- 13) 洲鎌盛一. 乳幼児の発達障害診療マニュアル 健診の診かた・発達の促しかた. 東京: 医学書院. 2013; 85-88.
- 14) 田村須賀子. 公衆衛生看護技術論. 宮崎美砂子, 北山三津子, 春山早苗, 他編. 最新公衆衛生看護学 第3版 2019年版 総論. 東京: 日本看護協会出版会. 2018; 252.
- 15) 清水嘉子. 母親の育児ストレスにおける相談と対処の実態とその関連性. 小児保健研究 2007; 66: 54-60.
- 16) 中板育美. 周産期からの子ども虐待予防・ケア: 保健・医療・福祉の連携と支援体制. 東京: 明石書店. 2016; 37.
- 17) 井伊暢美, 平野 互, 高野政子, 他. 保健師に求められる広汎性発達障害児と保護者への支援ニーズの検討. 保健師ジャーナル 2009; 65: 318-323.
- 18) 藤内修二. 地域母子保健の意義. 我部山キヨ子編. 助産学講座9 地域母子保健・国際母子保健. 東京: 医学書院. 2016; 11.
- 19) 藤内修二. 母子保健活動におけるポピュレーションアプローチ: なぜ, いまポピュレーションアプローチなのか. 保健師ジャーナル 2007; 63: 756-761.
- 20) 中板育美. 地区診断から始まる保健師の地区活動. 保健師ジャーナル 2013; 69: 96-103.